

アンドレイ・プラトーフ『ジャン』における オリエンタリズムについて：問題提起

古川 哲

1：問題設定

本論は、中央アジアを舞台にしたアンドレイ・プラトーフの中篇『ジャン』（1935年完成）において、オリエンタリズムがどのように現われているかを考察するものである。このような観点を触発した著作として、カルパナ・サーヘニー『ロシアのオリエンタリズム』がある。ロシア文学におけるアジア蔑視の系譜を振り返りつつ、徹底して無気力な存在として描くプラトーフのこの作品が、モスクワを中心とするソ連の優越を確認することに寄与している点を批判している。¹ 次節において検討するように、その成立経緯、またプロットにおいて、この作品においてそのように理解されても仕方のない要素がこの作品にはある。

しかしながら、サーヘニーの議論がサイドの『オリエンタリズム』を土台としていて、さらにサイドにおいてオリエンタリズムが、西欧が東洋を言説において表象し、一方的に自らの政治的・文化的な優越を強化していく体系として理解されていたことを念頭に入れば、² つぎの事実が重要な意味を帯びてくると思われる。プラトーフは中央アジアから妻に宛てた手紙の中で、砂漠を見ることがなかったら、砂漠を理解することはなかったと書き、そのようなことに役立つ本はないと付け加えているのだ。³ 『ジャン』が書かれる以前に、ソヴィエト作家による初めてのトルクメン訪問が1930年に行われ、いくつかの作品（チーホノフの『遊牧民』やパヴレンコの『砂漠』、『トルクメニスタン旅行記』など）が書かれていたことを考慮すれば、上述の手紙にはロシアにおける中央アジアの表象のされ方に対する批判を読み取ることが可能である。

本論では、『ジャン』におけるオリエンタリズムを端的に論ずるため、西欧に優越する東洋という図式がこの作品において提示されつつも、それが否定される局面が作品に書き込まれていることを指摘する。議論を分かりやすくするため、その前にこの作品の成立する

¹ カルパナ・サーヘニー『ロシアのオリエンタリズム：民族迫害の思想と歴史』（パルマケイア叢書）、松井秀和訳、柏書房、2000年、298-299頁。

² エドワード・W. サイド『オリエンタリズム』（テオリア叢書）、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1986年、20-23頁。

³ *H.V. Корниенко*. Платонов и коллективная книга 30-годов. «Здесь и теперь», №1, 1993. С.223.

背景とそのあらすじを見てみよう。

2 : 『ジャン』の成立経緯

1932年に、文壇におけるあらゆる党派的な活動が禁止された後、1933年の末から、翌年のソヴィエト作家同盟の第一回大会の準備が行われていた。1931年に発表された『ためになる』がプロレタリア作家の中心的存在だったファジェーエフに非難されて以来作品を発表する機会を失っていたプラトノフも、大規模に行なわれていた準備の一環として編纂される文集に寄稿すべくトルクメン共和国に派遣された、20人の作家の一人に選ばれたのだ。⁴ しかし、彼はソヴィエト作家同盟において決して歓迎されたわけではない。彼は作家同盟の第一回大会に出席していたが、発言する機会はなかった。⁵ また、彼はこのトルクメンでの取材を元にして4つの作品を書いているが、書かれてすぐに出版されたのはそのうちのひとつ、『粘土砂漠』（1934年発表）のみだった。⁶

3 : 『ジャン』のあらすじ

この主人公であるナザール・チャガターエフは、中央アジアの砂漠に住み、かつては奴隷として生活していた少数民族ジャンの出身である。彼は幼いころに母親に棄てられ、羊飼いに拾われ、ソ連による教育を受ける。モスクワ経済大学を卒業した彼を待っていたのは、彼の生まれ故郷に戻り、行方不明になったジャン族を探し出してその生活環境を向上させるという任務だった。彼は砂漠に赴き、ジャン族を発見する。しかし衰弱しきった彼らは、チャガターエフが援助しようとしても、より良い生活を想像することができず、従ってそれを欲することも出来ない。しかし、偶然チャガターエフが仕留めた鳥を、ジャン族の少女アイドゥイムがこの民族のほかの者に分けたことがきっかけになり、彼ら全員が生きる意欲を取り戻していく。この作品は検閲のせいでこの作品が発表されないことを恐れたプラトノフによって、二つの結末が用意された。⁷ 一方においては、チャガターエフはジャン族の人々を衰弱から救うことに成功するが、彼らは一人一人異なる方向に離散してしまう。もう一方においては離散したジャン族が再び結集し共同体を成立させる部分が加えられている。

⁴ *Н.В. Корниенко*. Платонов и коллективная книга 30-годов. «Здесь и теперь», №1, 1993. С.220.

⁵ *Михаил Геллер*. Андрей Платонов в поисках счастья. Москва, 1999. С.339.

⁶ *Михаил Геллер*. Андрей Платонов в поисках счастья. Москва, 1999. С.340.

⁷ *Н.В. Корниенко*. Платонов и коллективная книга 30-годов. «Здесь и теперь», №1, 1993. С.236.

4 : 「天国」と「地獄」

『ジャン』において、東洋に対する西欧の優位という図式があからさまに現われるのが、トルクメニスタンの砂漠に行く前に立ち寄ったウズベキスタンのタシケントでの、党書記とチャガターエフとの間の次の会話である。

「いきます」チャガターエフは同意した。「そこで私は何をすればいいのでしょうか。社会主義ですか」

「それ以上、何をすることがあるね」書記はいった。地獄に君の民はすでにいたのだから、天国に住むべきだよ、そして私たちは全力で彼らを手助けするんだ……。君はぼくらの全権というわけだね」⁸

しかし、そのような東洋と西洋の分割と、前者に対する後者の優越という図式が崩される場面が、この作品においてすでに、いま引用された箇所直前に存在している。そこにおいては、中央アジアのステップの自然がチャガターエフの感覚を圧倒し、しかもそれがモスクワから派遣されたという意味で中央アジアの外側に立つチャガターエフが、もともとの生まれは中央アジアであったという記憶を生々しく思い出していく過程が並行して進行する。タシケントに向かう列車を途中で降りて徒歩での移動に思いがけず切り替えてしまうまでのチャガターエフの行動を精密に描写することで、プラトノフは実のところオリエンタリズムの否定を行なっているのである。段階的に進むそのプロセスをおってみよう。

列車がモスクワを棄て去って長いことたっていた。移動が始まって何昼夜かすぎていた。チャガターエフは窓辺にいて、子供の頃歩いた場所をみわけていた。あるいはそれらは別の場所だったかもしれないが、寸分たがわず似ていた。⁹

この時点では砂漠周辺のステップ地帯は、車窓に切り取られ目の前を通り過ぎてゆく風景に過ぎない。彼にはまだ記憶と風景を対照する余裕があった。汽車はタシケントに向かっていて、彼はそこでその地の党中央委員会に出頭、ジャン族を探してウスチ・ユルト地区に向かう予定だった。故郷との予期されていた再会は、しかしながら、予期せざる形をとって不意に起こる。

ある夜ふけ、列車は急な理由で暗いステップに停止した。チャガターエフはドアから客車のデッキに出た。静かで、遠くで汽船の音がして、乗客はやすらか

⁸ *Андрей Платонов. Избранное. Москва, 1999. С.346.*

⁹ *Андрей Платонов. Избранное. Москва, 1999. С.344.*

に眠っていた。突然ステップの暗闇で、一羽の小鳥が短い叫びをあげた、何かに驚いたのだ。(中略) チャガターエフは客車から出た。出たすぐのところで彼は低木に気付き、そこまで行くと、枝をつかんで声をかけた。「藪くん、こんちは！」¹⁰

曠野は、車窓の風景であることを止め、濃密な環境としてチャガターエフをとりまき始める。聴覚が、嗅覚が、そして視覚がそれに適応を始める。

チャガターエフはさらに遠くに離れた。ステップでは何かがかすかに揺れて、ときおり叫び声が出た。ステップが静かに思われたのは耳が慣れていなかったからに過ぎなかった。大地は低地への下り坂となり、青くて背の高い草地が始まった。チャガターエフは、思い出していくことの興味深さにつられて草のなかに入った。根元をゆらされた草が彼の周囲で震えていて、いろいろな見えない生物が彼から離れて走り去っていった、あるものは腹ばいで、あるものは脚で、あるものは低く飛んで——それぞれが持っているものを使って去っていった。(中略) 自分の仕事を忘れたチャガターエフは、水の匂いを感じた。どこか近くに湖か井戸があったのだ。彼はそのほうに向かい、じきに、ある小さな濡れた、生育しつつある草地に入ったが、それは小さなロシアの茂みに似ていた。チャガターエフの目は闇に慣れ、彼はいまやはっきりと見ることができた。¹¹

藪を愛撫したあとに、ほとんど本能的に茂みへと自分の身体を滑り込ませたチャガターエフは、予定どおりの行動を取ることをやめる。

列車が音を立てずにそっと出発した。チャガターエフは追いつくこともできたが急いでいくことはしなかった。(中略) 彼は草の中で、安らいで、以前のように、大地に身体をぴったり寄せて、寝入った。¹²

この部分において、チャガターエフが周囲の動植物からの刺激に対して舌以外の全ての感覚器官を積極的に反応させていく様子は非常に官能的である。ゲレルは、『ジャン』はロシア文学作品のうちで最もエロチックな作品の一つであり、そうした官能性はこの作品における世界の描写にもいえると指摘している。¹³ 実は、そのような自然の描写そのものが、ソヴィエト文学においては特異だった。本論の冒頭において、中央アジアを舞台とする作品がソ連においてすでに存在していたことに触れたが、コルニエンコによれば、そうした、

¹⁰ *Андрей Платонов. Избранное. Москва, 1999. С.344-345.*

¹¹ *Андрей Платонов. Избранное. Москва, 1999. С.345.*

¹² *Андрей Платонов. Избранное. Москва, 1999. С.345.*

¹³ *Михаил Геллер. Андрей Платонов в поисках счастья. Москва, 1999. С.352-353.*

東部地域の自然の改造に関する散文を貫いているのは砂漠の自然と砂漠における過去の歴史に対する否定である。例えば、チーホノフの『遊牧民』ではソヴィエトの東部が保守性を振り払って社会主義の実現に向かい始めたのだと語られる部分があり、パヴレンコの『トルクメニスタン旅行記』には、砂漠に住む亀についての、「これがガラクタでなくてなんだろうか」という一節がある。¹⁴

同時に、茂みに踏み込みつつ、チャガターエフが、生まれ故郷を思い出しつつ「自分の仕事を忘れて」しまい、ついには眠りについてしまうことで、その後に会う書記との会話における「天国」と「地獄」の二分法は前もって崩されている、控えめにいっても弱められているといえよう。

結論にかえて

本論では、まず『ジャン』という作品がオリエンタリズムに寄与しているというサーヘニーの批判を見た。たしかに、党書記とチャガターエフとの会話には開発するものの優越というオリエンタリズム的な要素を読み取れる。しかしながらチャガターエフの途中下車のエピソードとそこにおける自然描写をおっていくと、そのような図式が相対化される契機をもこの作品が含んでいることがわかる。その上で、チャガターエフがジャン族に食物を与えて復活させようとし、ジャン族があらゆる欲望を欠いた存在として描かれていることの意味を考察する時、ジャン族に、決して中央アジアの不活発の象徴のみならず、ある理念（この作品においては社会主義の理念）をそれに共感し得ない他者に伝える行為を根底から考えるために作り出された形象という、より積極的な意義を読み取ることが可能になると思われる。

¹⁴ *Н.В. Корниенко*. Платонов и коллективная книга 30-годов. «Здесь и теперь», №1, 1993. С.224-226.